

涅槃講式について——『長谷寺・涅槃講式・天文版』の手直しと浄書

岩 田 章 三

常樂会と四座講式

涅槃講式とは、すでに宗派内で周知されているとおり、釈迦入滅の二月十五日に行う、追恩の法会である『常樂会』に含まれ、涅槃・羅漢・遺跡・舍利の四つの講式をもつて四座講式と称せられているもののひとつであります。

『常樂会』という法会は、この四座講式を中心に之に四箇法要を附して修行するものであります。

講式とは何かとなりますと、その定義は、

法会の儀式または儀式の次第を定めたる法則を指し、普通には總禮伽陀・導師着座・法要（密教大辞典には法用とあり）・式文・廻向よりなる。

としてありますが、現今はこの講式の主要である式文を指して講式と言われているようであります。また豊山派法則集には弘法大師誕生会講式・興教大師誕生会講式・仏生会講式等もあり、他にも数多くの講式はあっても、講式といえ、四座講式を指すようであります。

また講式を、声明として考えるに、聞き手に与える効果の上から「歌う声明」「読む声明」「語る声明」と三つの類型に分け、「歌う声明」の旋律の変化の面白さ・美しさを聞かせて感動させようとするのに対して、講式は「語る声明」であり、歌詞の意味をはっきり聞かせてそれによって感動を与えようとするところに特色があるとしています。講式は大般若法則とともに「語る声明」の代表とされているのです。

私もこれには同意であり、「語る声明」でありまた「聞かせる声明」であるがためにも優麗典雅なる言辞を使い、聞く者を感動させなければならないものであります。

さて四座講式の作者については通常我々宗門の僧侶としては、明恵上人御作とされております。異論については、金田一博士他の研究にお任せして素直に信仰と伝えを重んじて信じておきたいと心得るべきだと思います。

四座講式の中の涅槃講式

涅槃講式について述べますと、ふつうであれば、『常樂会』と四座講式の関係なのですが、問題は、四座講式といえは四つあるにもかかわらず涅槃講式に代表され、涅槃講式のみがおこなわれているということであり、法則集でも『常樂会』では四座講式を行うとはされていますが、第一涅槃講式を主として修する旨が記されており、次第には涅槃講式のみ記されています。

他の諸法会の様式と比較してみますと、『常樂会』は本来であれば長時間をかけ、もちろん講式を中心にして四箇法要が付随するものであります。ですから大綱を述べれば、入堂・着座・總禮伽陀・奠供・祭文・別禮伽陀・唄・散華・梵音・錫杖・涅槃講式・讚嘆伽陀・廻向伽陀・和讚・念仏・前讚・後讚・廻向方便・別

涅槃講式について (岩田)

本義であれば			法則集阿式			法則集縛式		
着座	着座	着座	着座	着座	着座	着座	着座	着座
總禮伽陀	勸請	勸請	勸請	勸請	勸請	勸請	勸請	勸請
奠供	奠供	奠供	奠供	奠供	奠供	奠供	奠供	奠供
祭文	祭文	祭文	祭文	祭文	祭文	祭文	祭文	祭文
別禮伽陀	總禮	總禮	總禮	總禮	總禮	總禮	總禮	總禮
唱名禮								
唄	唄	唄	唄	唄	唄	唄	唄	唄
散華	散華	散華	散華	散華	散華	散華	散華	散華
梵音	梵音	梵音	梵音	梵音	梵音	梵音	梵音	梵音
錫杖	錫杖	錫杖	錫杖	錫杖	錫杖	錫杖	錫杖	錫杖

『常楽会』次第の比較

禮伽陀・羅漢講式・讚嘆伽陀・廻向伽陀・和讃・念仏・別禮伽陀・遺跡講式・廻向伽陀・和讃・念仏・別禮伽陀・舍利講式・讚嘆伽陀・廻向伽陀・和讃・舍利讚嘆・舍利禮・奉送・称名禮・退座 となるようです。各講式にはそれぞれはじめに三禮如来唄と、終わりに六種廻向が付属するようであります。(ただし四つの講式をおこなう場合、涅槃講式には、譜本に六種廻向が特に記されていない。)

これを法則集と比較すれば、

涅槃講式	講式	
讚嘆伽陀	伽陀	
廻向伽陀		
和讃	和讃	
念仏	念仏	
前讃		
後讃		
廻向		
別禮伽陀		
羅漢講式		
讚嘆伽陀		
廻向伽陀		
和讃		
念仏		
別禮伽陀		
遺跡講式		
廻向伽陀		
和讃		
念仏		

涅槃講式について (岩田)

別禮伽陀

舍利講式

讚嘆伽陀

廻向伽陀

和讃

舍利讚嘆

舍利讚嘆

舍利禮

舍利禮

舍利禮

奉送

奉送

奉送

称名禮

普禮

普禮

退座

退座

退座

となります。

法則集阿式二つ目の勧請が次第の語句の内容から勧請・總禮伽陀・称名禮に分けられ、阿式總禮が、別禮伽陀にあたります。

また同じく阿式奉送も、その内容から奉送伽陀・廻向伽陀・称名禮に分けられます。

中賢乗先生と尊敬する諸先輩方と豊山派法則集や諸々の儀則集や資料をみていますと、豊山派法則集に記されているように長時間を要するをもって略されているものではありませんが、最初の涅槃講式はきちんとやって、中抜きして最後の舍利講式の代りに舍利讚嘆と舍利禮をやって、一応最初と最後だけはきちんとやり終わらせているという体裁だけは整えてあるように作られているようです。

今でも高野山ではほぼ一昼夜をかけて仏弟子の修行として四座（四つの講式）全て行っている様ですが、推察しますに豊山派では、「語る声明」「聞かせる声明」としての位置付けが大きなウエイトを占めるため、その方便として略して短時間化したものではないでしょうか。

『奈良長谷寺・涅槃講式・天文版』の手直しと浄書

私も『常樂会』といえは涅槃講式と長い間思い込んでおりました。

総本山長谷寺研修所に入所している時期（昭和五七・五八・五九年）に、涅槃講式と舍利講式をはじめて教わり、それも貞享版の複写コピーをポンと渡され、なんにも読めない状態で一字一句読み聞かされて自分でルビを付け博士を書き足して、研修所に来ていただいていた新井先生と当時宰堂であられた中賢乗先生にくだいほど唱えていただいて習得したものでした。

その後、羅漢講式と遺跡講式については、次第（譜本）もあり、聞く機会もありましたが、きちんと丁寧に面授面授では教わっていないというのが現状です。また舍利講式については智山の次第で行っております。

私が総本山長谷寺研修所に入所している間に縁あって『奈良・長谷寺・涅槃講式・天文版』の複写コピーを配っていただき、貴重な資料であると認識しながらも、虫食いがひどく、普通なら読めない状態だったため手付かずになっておりましたものを、校正など全く解らない素人の私が自分のライフワークとして修正液とサインペンでなんとか読めるようにしてみました。したがって私用の次第（譜本）の翻刻であります。

またそれに付随して浄書を行い、この涅槃講式と貞享版と中義乗先生の次第を比較して、習字など習った事もない我流の汚い字で書き終えました。これらに關しては、繰り返しますが全くのライフワークで、他人に見せるつもりなどさらさらありませんでしたが、尊敬する先輩諸氏に発表を促され、何とかしてみようと思ひ立った次第です。なにしろ私自身が目立つようなことが嫌いであり、宗門の勉強というのは何よりも聞くことであり、師の教えを伝えることが最重要であると心得ていますため、二の足を踏んでおりました。という訳で手直しと浄書については、まことに恥ずかしいものであります。

『奈良・長谷寺・涅槃講式・天文版』について

四座講式の次第(譜本)については、一般には貞享版と元禄版が流布しているようですが、金田一博士の研究によれば、天和版(一六八一―一六八四)貞享版(一六八四―一六八八)元禄版(一六八八―一七〇四)正徳版(一七一―一七一六)が新義派が用いていた版本であるとされており、その他に寛永版・明暦版・宝暦版が用いられていたようであります。

これら版本(刊本)以前に正平十二年(一三五七)文明十五年(一四八三)光台院蔵本(年代不明)大慈院旧蔵本(建保3年・一二一五)等があるようですが(涅槃講式に限る)、『奈良・長谷寺・涅槃講式・天文版』(一五四二)はこれらの中で文保本(一二三二―一三一九)の次に位置し、その後の天正本(一五七三―一五九二《新義》)・光台寺本《進》・朝位六十九歳本《進》・朝位四十九歳本《進》の枝分かれする、進流用と新義用に分かれるターニングポイントの場所に位置します。

なる個所にはその旨記載しましたが、博士は大綱変わりは無く、ユ、○にユ、○にユの下に点が一つのも
と点が三つのものの有り様や、その博士の添付される場所が、多少の差異があります、一応は『貞享版』が
読めれば習いどおりに使用できるものであると思われます。

『天文版』と『貞享版』と中義乗先生次第の比較について

これら手直し・浄書した『天文版』と一般に流布している『貞享版』と、親しくいつもおじゃまさせてい
ただいている中賢乗先生から複写させていただいた御尊父中義乗先生の次第を比較させていただきま
す、音程については我々が伝え受けた旋律や技法（初重二重三重や、中音や沓 $\parallel$ 下音など、また初重二重三重での
博士の違い）がその次第の成立と同じであればほぼ現在と同様にはなると思われます、つまり記録（次第）の
変化はあまり多くは無いと思われませんが、問題なのはそれを伝える技術や音程が正確であるかどうかとい
うことだと思われま
す。記録として文字に残る限りには、それはそれで正確であろうと思われる以上、旋律等
の技法がどのように変化しているのが問題となるわけです。

その中で、比較の対象にさせていただいた中義乗先生の次第が全て写筆されていて博士が附してあり、ま
ず間違いない中先生が唱えていたとおりの博士であろうと思われ、中賢乗先生もそのように申されている事
から、「唱えていた博士」として信用できると考えられます。

その上で比較してみますと、私達が行っている現在伝わっているであろうと思われるものと、全編に渡りユ
の旋律が博士から外れている箇所があります。

「四座講式の研究」金田一春彦著 三省堂 付録五六二頁

(25) 付 録 562



〔楽譜 8 (c)〕新義派：涅槃講式・三重

風唱・採譜
初重に同じ

(注)歌詞のうち、ヲの仮名は[wo]と唱える。ツンは[7]のtnに同じ。

資料① 金田一春彦著「四座講式の研究」(三省堂)付録562頁より転載

それ以外であれば、これを西洋五線譜に直してみれば、全く金田一博士の示したとおりであります。唱えることができる者から見れば、前後の関係から確たる博士の譜に頼っているのではなく、ユの部分、特にユの中の終わり部分のユリウゴカス場所の一越になるところが変わらず音程を取られているのでこれを基音として考えなければならな

いようです。

これは、旋律の前後関係や、唱えられた先生の優劣や、唱え癖にかかわらず、絶対音感といわれるもので、基音となる音がどれだか分からなくても構わずに五線に表してしまおうという方法で、『四座講式の研究』で表されている五線譜もこれに当たります。

特に五段のユの部分については、金田一博士の記した基音から三重の基音を取るとすれば、天文版・貞享版の次第から推察される旋律は、後述の音譜のなるとおもわれます。これは、基音をもとに博士にあてはめ

涅槃講式について (岩田)

涅槃講式第五発願廻向 涅槃彼岸 無生喜樂矣

資料②

てみたものです (資料①)。

補足の為に付け加えれば、金田一博士譜に準じてほぼ近似音・いわゆる絶対音を採るのですが、基音については、講式は独唱であるため定めが無い、同じく独唱である「唄」に準じて「一越」として十二律の定めから近似音「D」を「一越」にあてて配列した表を作成しました (資料③)。

しかし初重二重三重の違いは講式という独唱のやりかたと、二箇法要等に用いられる同習される声明のものと違い、言わば論議等に用いられるが如きものです。ここでは初重二重三重の基音は、金田一博士譜の絶対音感譜にあわせて表現しました (資料②)。

また例えて言えば博士どおりに唱えれば、雅楽に見られるような旋律であり、講式の終わりに当たり感動を与える様になっているように思われます。

六種廻向について

普通六種といえは、関伽・塗香・華鬘・焼香・飲食・燈明のことを指し、六種廻向といえはこれら六種の供具を諸尊に奉献することをいうのですが、ここでの六種は講式のみで使われる慣用句であるようです。

六種廻向としてこれらを特に六種挙げて供養するのは、

涅槃講式について (岩田)

講式のみであります。

これら六種廻向というのは、貞享版には、六種廻向とのみ次第に書かれているのみで、中義乗先生の次第には特に記してはありません。智山の次第に書かれてあるものと、瑜伽教如師の朱書きにあるものと、現在総本山長谷寺で行われているものが現在のところ豊山派で用いられているようです。

これらはいずれも舍利講式の後に記されているか、または朱で書き足されているものなのですが、『天文版』には涅槃講式のみであるにもかかわらず、ことさら六種が全て書き出されてあります。

もしかすると四講式おこなう場合には、涅槃講式の終わりでは六種廻向をやらず、涅槃講式のみ場合には六種廻向を涅槃講式の終わりに付けるのかもしれませんが。

そうなれば天文年間から長谷寺では、真言宗豊山派になる以前から『常楽会』は涅槃講式のみをもって行われていたのかもしれませんが。

記載されている六種廻向の違いについては、場所によって鎮守等が変わることを考慮すれば、大綱には意味の違いは無いとしたいのですが、現今の伝えに自ずと疑問を生じる結果となっていました。これらは、師の伝えによるしか無いようです。

六種廻向の違いを列举すれば、

〈天文版〉

〈瑜伽教如朱書き〉

〈智山〉

天衆地類

天衆地類

天衆地類

當所伽藍

當所伽藍

當山伽藍

一切冥道

一切冥道

一切冥道

當所神等

當所(山)神等

當山鎮守

行疫神等

行疫神等

流行役神

家内諸神

家(山)内諸神

山内諸神

以上それぞれに廻向の句がつけられる。

現在長谷寺では、

天衆地類廻向

一切冥道廻向

流行役神廻向

當山伽藍廻向

當山鎮守廻向

山内諸神廻向

となつてゐるようです。

句の違いは後に研究をされる方の課題としていただきたいと思います。

おわりに

四座講式は、金田一博士が研究課題とされて『四座講式の研究』を表し、これによって博士号を取られた

涅槃講式について（岩田）

ことはよく知られている事です。その中で、講式は、研究材料として一級品であり、現代諸邦楽の父であると述べられ、日本声明の頂点に達したところに咲いた花とまで賞賛しています。

特に新義声明についての扱いは丁重です。

これらの伝統を是非絶やさないで伝えていただきたい。現在でも一部の間でしか伝わっていないものであると思うのですが、これらを復興していただきたいと切に願うものであります。是非とも学生諸君に、時間の労を厭わずに古い次第に依って自ら朱を入れながら、面授面授で習熟されるようなものであつてほしいと思います、その足がかりになればありがたいと思います。

先述しましたように、大正大学卒業後総本山長谷寺研修所に入所し、修了後事相研究所所員として総本山灌頂・伝法大会等に努めておりましたが、この時期ちょうど豊山派宗務所の建て替えの時期に重なりましたので、私達、当時の事相研究所の者は直接中賢乗先生の御自坊に訪問して教えを受けておりました。

事相研究所を終了してから、新しい宗務所が出来たという事で、宗務所の声がかかりで、事相研究所修了者を対象に、事相研究会が発足され、その中に最年少で参加させていただきましたことになりました、阿闍梨に南波義範先生を迎え、次に阿部快元先生に教えていただきましたが、先生のご都合から阿部先生の御自坊へ訪問するようになり、教えを受ける者も三人に定まってしまうしました。

阿部先生がお亡くなりになった後は、自主的に中賢乗先生の御自坊へ訪ねさせていただき、現在にいたっております。諸先生・諸師・諸僧のめぐり合わせには、感謝感激しております。

個人のライフワークとして素人がやった勉強に対して、発表する場があるという豊山派に感謝しますと

もに、日頃からお世話になっております、中賢乗先生、大沢聖寛師、内藤良家師に感謝いたします。

参考文献

四座講式の研究

金田一春彦著

真言宗諸法会儀則集成

稲谷祐宣編

智山声明大典

大本山川崎大師平間寺

魚山精義

密教大辞典

法蔵館

密教辞典

佐和隆研編

比較文献ならびに参考文献

豊山派法則集

真言宗豊山派宗務所

瑜伽能化手擇四座講式

如意山 乙寶寺

涅槃講式法則

千手院 中義乗

常楽会法則

小野塚僧正述

常楽会法則

大聖寺 石井聖己

常楽会法則

大本山川崎大師

【キーワード】天文時代の涅槃講式、文字（記録・次第）にあまり変化なし、旋律はどうか？ 六種廻向の配

置で古来の法要のあり様がわかるのではないか？

涅槃講式について (岩田)

〔手入れされた天文版涅槃講式〕

涅槃講式 豊山
 先惣礼 勸學院
 物部城邊花河在坐維林樹下
 頭北面西脇外二月十八日
 勸學院主釋迦牟尼佛
 次通所着座 次法用 次表曰
 敬曰大恩教主釋迦牟尼佛
 涅槃者乃八萬四千四百四千萬
 衆二類一、廣普毛端刹海正
 法一、之寶境衆曰吉
 更には他勸釋、何物も来世生
 成、幼穉主何群衆長去梅檀
 花中見衆、佛身滿雲以火火
 水、同普眼衆、終非合歡喜之

水、同普眼衆、終非合歡喜之
 天上蓋圍、誕生流痛情、後主價
 林入、中、主、一、代、に、候、爲
 長、帳、之、群、衆、之、地、之、百、六、十、之
 法、度、之、沈、溺、法、子、之、死、得、也、之、元
 悲、遠、迄、於、未、其、濟、度、之、衆、衆、衆
 地、爲、平、次、之、使、之、成、不、有、少、任
 之、功、法、之、長、米、將、既、之、法、法、之、長
 根、之、昔、海、之、廣、之、衆、衆、今、月
 今、月、所、廣、之、所、付、延、法、之、衆、衆、入
 成、之、清、魔、之、衆、衆、在、道、法、之、衆、衆、之
 衆、衆、之、衆、衆、之、衆、衆、之、衆、衆、之
 任、過、之、大、衆、之、衆、衆、之、衆、衆、之
 淨、廣、之、衆、衆、之、衆、衆、之、衆、衆、之

於中主入城常與溫國必能獲林
 寺莊務和回向大門柱頭表意也
 歎有
 第一頭入城表傷去凡六代八
 十箇年幸誕生伽耶成道誓畢
 領諸蠻林入城常起大慈大悲
 建寺造巧方便濟軟威仁低處
 常與利生海無窮生之我商
 度服之有者之得大宅法百且具
 平焚燒以苦滅度之至今復覺
 系見苦若海獨子信得家意
 後世淨佛告以新水未不久後
 其日高般涅槃今時和又大將石
 教應罪占百萬億衆又為等同

衆衆也注而後年收後之功德
 事等金也光明身功德法度滿月
 面肩同白象牙物和我今宿歸
 冷札
 一毫定圓涅槃為定若大衆
 之運教已過時也末不長衣之
 大衆作最後之恩其中人悲歎何
 相為衆年並則於力士生他處
 林同教而門之文二月末之朝
 若寂寂之利不中二類之耳善
 於圓王然於一恒沙大善薩為
 為衆等教皆中不類為衆十
 恒沙羅刹王下衆所為力上善

〔浄書涅槃講式〕

涅槃講式

狗尸那城跋提河 在娑羅林雙樹下
 頭北面西右脇臥 式月十五夜半滅
 南無大思教主釋迦牟尼如來生々値
 過頂戴

次導師着座 次法用 次表白

敬白大思教主釋迦牟尼如來涅槃
 遺教八萬聖教娑羅林中五十二類
 一々微塵毛端刹海不可説々々々

三寶境界[㊦]而言

去法性絶動靜々々任物如來無生
 滅生滅[㊦]約機至如彼韓琴長者梅檀
 塔中見常住佛身海雲比丘大海水

上聞普眼契經誰含歡喜之咲藍菌
 誕生流痛惜之寢于雙林入滅乎^者是
 知八相一代之化儀驚長眠群類之
 明燈三百五十之諸度渡沈倫諸子

涅槃講式について (岩田)

之飛梯也其光照遠達於末代其濟
 度不捨乎聞提鳴呼憑哉快哉我等
 有聞信之功德者長夜將曉有結緣
 之善根者苦海當渡依之每迎今

月今日開演四座法筵泣恋雙林入
 滅之音慇懃現在遺跡之德且為慰
 滅後孤露之悲歎且為成當來值遇
 之大願也開一々旨趣在後々講席

當座是開白涅槃之初度也於中立
 入滅茶毗涅槃因緣雙林遺跡殆願
 廻向五門粗顯恋慕悲歎之旨矣
 第一顯入滅哀傷者凡如來一代八

十箇年廻章誕生伽耶成道驚筆說
 法雙林入滅智起從大慈大悲悉出
 從善巧方便雖歎威化儀區皆無非
 利生緣然而初生之我當度脫三有

当座是開白涅槃之初座也於中立
 入滅茶毗涅槃因緣雙林遺跡苑願
 廻向五門粗顯恋慕悲歎之旨
 第一顯入滅哀傷者凡如來一代八

十箇年迴章誕生伽耶成道驚掌說
 法雙林入滅皆起從大慈大悲悉出
 從善巧方便雖歎威化儀匠皆無非
 利生緣然而初生之我当度脱三有

衆生有感無不應 究竟令得大菩提

南無娑羅林中最後寂滅紫金妙體

涅槃講式

次神方 次六種廻向

天衆地類廻向 當所伽藍廻向

一切冥道廻向 當所神等廻向

行疫神等廻向 家内諸神廻向

六種廻向、現多卷等ニ於テ、

天衆地類廻向、一切冥道廻向、當所伽藍廻向、當所神等廻向、

山内諸神等廻向ノ六種トナシテ、

ト同ク但シ各廻向ニナリ

*掲載頁数の関係から全三十二頁のうち、始めの数頁と最終頁しか今回は都合上載せられなかった。